

北京オリンピックに向けて行った科学的な取組

フェンシング

松尾 彰文¹、オレグ・マツエイチュク²

¹国立スポーツ科学センタースポーツ科学研究部、²(社)日本フェンシング協会

女子フルーレでは菅原選手が個人種目での初入賞と、男子フルーレで太田選手がはじめてのメダルを獲得した。菅原選手は、16Round ではランク6位のゴルビツキ選手(ドイツ)を延長戦で勝ち、次のナム選手(韓国)(オリンピック2位)には10-15で破れたが、7位であった。太田選手は16Roundでは、チョイ選手(韓国)を15-14で、準々決勝でランク1位ヨピッチ選手(ドイツ)を15-12、準決勝ではサンツォ選手(イタリア)に15-14で勝ちメダルを確実にした。決勝ではクライブリック選手(ドイツ)に9-15でやぶれた。決勝までは自分よりもランク上位の選手に次々に勝ったことと、14-14という接戦が2試合あったことは注目すべき点である。男子フルーレに出場したもう一人の千田選手は16Roundにおいて優勝したクライブリック選手に10-15で破れ、11位であった。

フルーレの輝かしい成果は、オレグコーチや選手たち個々の努力があつてこそのものであるが、JISSではオリンピック大会での映像提供や映像データベースでの情報提供、トレーニング活動中には、メディカル、フィットネス、メンタル、トレーニングや栄養の側面でサポートしてきた。コーチからの要望やフェンシングの強化拠点がJISS内にあることなどから日常的なトレーニング活動中のサービス提供が行いやすかった。

TSCチェックデータの分析から選手個々の体力要素や課題を明確にしてトレーニングプログラムを提供した。プログラムを進めながらもコンディショニングのモニターやトレーニング体育館での筋力および持久力のチェックにより効果を確認しながら内容(種目・負荷・回数など)の検討を行なった。また、メンタル面でも選手個別の要望に応じたサポートを提供した。これらのことが動機づけにもつながり、継続的に複数のカテゴリーからのサポートができたと思われる。

ライバル選手たちの競技会での映像は戦略上の基礎的な情報でもある。そこで、過去のビデオ映像をiTunes(Apple社)でデータベース化、iPod touch(Apple社)でも閲覧できるようにし、選手やコーチが遠征先やその移動中でも容易にみられるようにした。また、試合当日の映像も戦略上有益な情報となりうることをワールドカップキューバ大会で確認できた。

科学会議では、オレグコーチにはJISSからの科学サポートについてコーチの立場から、また、情報、トレーニングやメンタルの側面からサポート活動の詳細について報告する。



図 1. 試合会場でのビデオ映像撮影風景(左)と太田選手がベスト4を決めたランク1位のヨピッチとの対戦(右)。